

# おもちゃ絵画家・人魚洞文庫主人川崎巨泉のおもちゃ絵展 とその画業の周辺について一附・川崎巨泉年譜(稿)・「これがおもちゃ 絵だ！」関連講演会レジュメー

森田俊雄（中之島図書館）

## 〔1〕人魚洞文庫とおもちゃ絵

### 1-1. 人魚洞文庫の展示について

当館では2006(平成18)年10月11日から10月26日まで、3階文芸ホールにおいて「これがおもちゃ絵だ！ー巨泉玩具帖に見る大正・昭和初期の郷土玩具ー」展を開催した。

今回の川崎巨泉のおもちゃ絵の展示は、本年5月に巨泉の肉筆画帖『巨泉玩具帖』『玩具帖』に描かれた全てのおもちゃ絵を「人魚洞文庫データベース」としてデジタル化し、当館ホームページで一般公開したことを記念する意味があった。人魚洞文庫とは『巨泉玩具帖』『玩具帖』そして『索引』の116冊を指すもので現在は貴重書に指定している。人魚洞文庫のデジタルアーカイブ化の経緯は2002(平成14)年度、TAO事業(1)で全画像をデジタル化したことから始まった。2003(平成15)年度は玩具帖に記載された巨泉の解説を翻刻し、玩具の製作県の特典などを調査するために費やされた。その際、節句と人形・玩具(以下「玩具」は「郷土玩具」を指す。)の研究家としても知られる石沢誠司氏(現京都文化財団京都府立文化芸術会館館長)に玩具製作県の特典などでご協力を得、人魚洞文庫データベースが完成した。

人魚洞文庫が当館に寄贈されたのは1942(昭和17)年11月、巨泉没後2ヶ月ほどあとのことである。寄贈された玩具帖が展示されたのは1943(昭和18)年9月のことであったので今回は63年ぶりの一般公開となった。因みに1943(昭和18)年の展示記録としては『川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本展覧会目録』(昭和18年9月12日発行)A5サイズ、33頁の小冊子を大阪府立図書館(現大阪府立中之島図書館)が編集発行したものが残る。展示内容は巨泉が生前制作頒布した『巨泉おもちゃ絵集』『巨泉漫筆おもちゃ箱』などを始めとする主要な画譜の全て、そして寄贈された人魚洞文庫、また巨泉の愛用の東京犬張子、八戸木馬などの郷土玩具(以下「玩具」)8点、他に玩具を神祇、武器、武者人形、鬼退治、軍用動物、猛獣、不倒、経済力、増産、海上輸送、人形総動員、大東亜共栄圏及同盟国の12の主題に別け、戦争遂行に見立てて展示している。展示期間は巨泉の一周忌を記念し9月12日から14日の3日間開催された。

さて今回のおもちゃ絵の展示であるが、巨泉と同時代人で彦根の玩具コレクター高橋狗佛のコレクションのうちから『巨泉玩具帖』『玩具帖』に描かれたものと同じ玩具や貯金玉（貯金箱）等 38 点を、所蔵する彦根市立図書館から借用し、あわせて国宝・彦根城築城 400 年祭実行委員会の後援をえて開催の運びとなった。

高橋狗佛について研究家藤野滋氏の論考によりながら紹介したい。高橋狗佛は本名敬吉。1874(明治 7)年、井伊家彦根別邸の家職高橋要の次男として現在の彦根市に生まれた。滋賀県立尋常中学校(現滋賀県立彦根東高等学校)卒業後、滋賀県立蚕糸業組合立簡易蚕業学校(現滋賀県立長浜農業高等学校)の教員を経て、1907(明治 40)年、33 歳で私立日本済美学校の中学の理科教師となる。1916(大正 5)年ころ井伊家当主直忠に懇望され当時 7 歳の双子の兄弟直愛、直弘の家庭教師兼訓育係となり東京麹町の井伊家に入る。環境の変化により神経衰弱となりかけた狗佛を救ったのが玩具(おもちゃ)だった。1922(大正 11)年三田平凡児が始めた我楽他宗に参加し、犬の玩具蒐集家として知られた。



狗佛の蒐集品：「鯛車」(図 1)



巨泉画：「大阪製鯛車」(図 3)



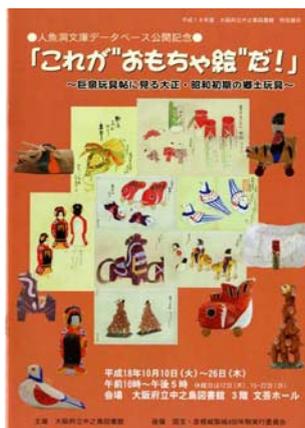
狗佛の蒐集品：「虎乗り加藤」(図 2)



巨泉画：「虎乗り加藤」(図 4)

1944(昭和 19)年蒐集した玩具を彦根市立図書館に寄贈した。その数 2376 点。玩具の大半は 1924(大正 13)年から 1936(昭和 11)年の間に蒐集されたものである。1953(昭和 28)年

に亡くなるまで井伊家の教育係りとしての職責を全うした(2)。



図録(図5)

展示会場の3階文芸ホールの中央に置かれた8面の可動式展示ケースを東北、関東、中部、近畿、大阪、中国・四国、九州の7つの地域の分け、それぞれに巨泉玩具帖や玩具帖と狗佛の玩具を並べた。壁面の展示ケースには“巨泉を知る”として錦絵集『大阪名所』『大阪名勝十六景』、引札、絵図、印譜、個人誌『人魚』、『おもちゃ画譜』『おもちゃ十二月』などを配した。師であり義父でもあった浮世絵師中井芳瀧の画業の紹介として『浪花百景』や役者絵を中心に並べ、

おもちゃ絵の系譜としては江戸時代の玩具絵本『江都二色』、明治・大正の玩具絵本『うなみの友』、おもちゃ絵関連として淡島寒月の『おもちゃ百種』、有坂与太郎の『日本玩具集 おしゃぶり』、玩具研究誌『片言』、『鳩笛』などを展示した。また国宝・彦根城築城400年祭実行委員会関係として2007(平成19)年度彦根市で開催予定の国宝・彦根城築城400年祭の案内パンフや高橋狗佛の紹介と狗佛コレクションの貯金玉も併せて紹介した。

展示図録(A4版12ページ、表紙はカラー、中の写真は白黒)は巨泉、芳瀧の説明に始まり展示された地域の主要なおもちゃの解説、巨泉の略年譜等を掲載した。3000部を作成し会場で頒布するとともに都道府県立図書館等に寄贈した。

## 1-2. 人魚洞主人川崎巨泉について



巨泉肖像(図6)

人魚洞文庫の主であった川崎巨泉は本名を末吉と言い、1877(明治10)年川崎源平の三男として泉州堺の神明町坊ノ前で6月2日呱呱の声を上げた。兄は『住吉・堺名所并ニ豪商案内記』を自ら書き出版した川崎源太郎。13歳(16歳という説もある)で大阪の浮世絵師中井芳瀧の門に入り、浮世絵を修行し摺物画、引札、風俗錦絵などを手がけ、1897(明治30)年代には商業広告、新聞広告の下絵などを制作し民間の図案家としても活躍した(3)。浮世絵師、おもちゃ絵画家、デザイナーでもあった。雅号は巨泉、別号とし

て人魚洞、芳齋、碧水居、碧水軒、虚僊、碧水があり、別に人魚生や巨の字、碧、碧水坊なども使った。巨泉の雅号は和泉の堺に生まれたことから付けたもの。1899(明治32)年芳瀧の息女ハマ子と結婚し、1903(明治36)年頃におもちゃ(郷土玩

具)に興味を持ち始め、その後玩具のデザイン・製作、おもちゃ絵の製作・販売などで明治末期から大正、昭和前期にかけて活躍した。主なおもちゃ絵集に『巨泉おもちゃ絵集』『おもちゃ百種』『巨泉漫筆おもちゃ絵集』『おもちゃ画譜』などがある。また個人誌『人魚』を1921(大正10)年2月に創刊した。同時に郷土玩具を研究し『郷土趣味』『旅と伝説』『郷土研究・上方』『鯛車』などに文章を発表した。俳諧、川柳、詩を好んで作り、落語好きでもあった。

趣味・遊びの世界では高橋好劇が1919(大正8)年に創始した浪華趣味道楽宗の第11番札所・碧水山虚僊寺でご本尊は人魚とおしゃぶりとした。また浪華趣味道楽宗から分派した娯美会、また<sup>おもちゃかい</sup>面茶会、おもちゃ十二支会など皆それぞれに趣向を凝らした遊びの会に積極的に参加した。娯美会での呼び名はハマ子婦人の亭主で“ハマの亭主”と呼ばれた。漢字で書くと“浜野禎州”、別に“種野禎州”とも号した(4)。

1942(昭和17)年9月15日逝去。法号は「幽谷院芳雲巨泉居士」。墓は堺市の大安寺にある(5)。なお雅号の人魚洞の人魚は人形のこと、で、“にんぎょう”を“にんぎょ”と地口で洒落たものである。人魚洞と名乗るだけあって、人魚の人形、錦絵、ポスター、レッテル、封筒、絵葉書、燐寸、外国雑誌、絵画など人魚のものなら何でも集めた。“魔の海や人魚の肌のうつくしき”(巨泉)。この他にも巨泉は、お守り、御影、縁喜物<sup>マフ</sup>の由来書き、一枚摺り、小冊子。各地名所の名所図・案内図、神社仏閣の古図(木版、石版、銅版)などを蒐集した(6)。

生前巨泉が日本民族玩具協会の雑誌『鯛車』6巻5号の記事「愛玩拾遺(一)」の設問に答えたものを引用する。出版年は巨泉が亡くなった年の1942(昭和17)年5月1日発行である。

川崎巨泉

(一)職業：日本画家。

(二)生年月日：明治十年六月二日。

(三)出生地：和泉 堺。

(四)玩具研究の動機：絵に書けそうな郷土玩具を集めてスケッチして置いたのが動機となり、明治末期より其蒐集に全力をあげて進む。

(五)秘蔵の民玩：何回も何回整理せし故に今手元に残せしものは自分の好きなものだけ、其多くはスケッチ帖百四五十冊に納めたり。(筆者注：このスケッチ帖が人魚洞文庫

の巨泉玩具帖と玩具帖である)

(六)編著書：自販としては、巨泉おもちゃ絵集、おもちゃ箱、郷土の光、おもちゃ画譜、肉筆おもちゃ千種、又、京都木戸氏蔵版の起上り小法師画集の図画。其他頼まれたものには、おもちゃ十二支、おもちゃ十二月、郷土紋様集、おもちゃ博覧会等其他種々あり。

(七)関係団体：之迄は種々の趣味の会に加入せしも、時局下、何れも休会のもの多く、至って淋し。

(八)趣味：人形や玩具を集めることが酒や甘いものより先にたつ。

1929(昭和 14)年に出版された島屋政一の著書『日本版画変遷史』(7)に巨泉の紹介がある。「巨泉氏は姓川崎、名は末吉、師芳瀧の長女濱子を娶りて、大阪南区鰻谷に住し漁人洞と号し、後ち西成区有楽町に移住した、明治大正より昭和の今日に至るまで版画に精進し、特に明治大正時代に於ける石版々画家として第一流の名があつた、殊におもちゃ絵に秀で、その作品少なからず、又昭和六年には『芳瀧画集』を自家版として発行せしが如きは、その美挙真に推称すべきである。」

『芳瀧画集』の出版年月日は1931(昭和6)年6月10日。印刷所は株式会社大阪国文社。個人誌『人魚』もここから出した。大和綴。寸法はタテ約22cm×ヨコ約15cm。内容は巻頭に芳瀧の肖像写真・賞印・画印があり、中の図版は白黒で21枚挿入され、それぞれについて巨泉が巻末に解説をしている。この解説が芳瀧を知る好材料となっている。

巻末の「小冊子について」で巨泉はこの本の出版意図を語っている。なによりもまず師父芳瀧への報恩である。芳瀧の作品については借用する暇もなく自分の所蔵品によつたこと。また門人たちが物故したことで逸話や記録がないので十分な内容とはいえないが小冊子として250部を作つた。「又此時代の絵師の作品の片影とも見て頂く事が出来れば幸いと存じます。」と結んでいる。

なお巨泉の業績や思い出を綴つた本に下記の3冊がある。

(1)『郷土玩具界の先覚 川崎巨泉翁を偲ぶ』川崎巨泉翁供養会編発行 村田書店製作 昭和54年

内容：小谷方明「川崎巨泉翁の思い出」、川口栄三「著作解題」、「川崎巨泉画伯略伝」、「略年譜」、「川崎巨泉翁供養会々則」

(2)『第一回巨泉忌』奥村寛純編 川崎巨泉翁供養会発行 村田書店製作 昭和54年

内容：「巨泉生誕百年と三十三回忌法要」を1979(昭和54)年9月15日に川崎巨泉翁供養会々長小谷方明、郷土玩具文化研究会代表舩健之助、全国郷土玩具友の会近畿支部長浜口新次が呼びかけたもの。堺の大安寺と海会寺で行われたその報告書。

(3)『おもちゃ画譜』復刻版 川崎巨泉著 奥村寛純校補・解題 村田書店 昭和54年

内容は巨泉のおもちゃ画譜10巻と小谷方明「おもちゃ画譜を出された頃」、中山香橘「おもちゃ画譜」復刻を祝して、「川崎巨泉先生の思い出」、小宝・太田健次郎「川崎巨泉先生を偲んで」、奥村寛純「解題：“おもちゃ絵と川崎巨泉画伯”」、「川崎巨泉画伯略伝」、「略年譜」がある。

なお(1)(3)の巨泉略年譜の内容は同一で、その元資料は1943(昭和18)年の大阪府立図書館作成の『川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本展覧会目録』所収の略年譜であり、それを若干追加訂正したものである。

さらに民俗玩具研究家奥村寛純氏の『浪花おもちゃ風土記』(村田書店発行 昭和62年)は大阪の近世から現代に渡る「大阪の町に息づいて来た」玩具の歴史などについて、巨泉をはじめ大阪の玩具に関係した人たちの思い出を交えて詳述されている。巨泉作の「楠公子別れ土人形」など珍しい写真も掲載され、「湊土人形と津塩政太郎翁」の項では、巨泉考案の土鈴の名前が挙げられている。巨泉に関しても貴重な文献である。

### 1-3. おもちゃ絵とは何か

今回の展示のタイトルとして掲げたのは「これがおもちゃ絵だ!」であった。サブタイトルに「巨泉玩具帖に見る大正・昭和初期の郷土玩具」としたので、ご覧になった方たちは郷土玩具絵の展示と理解して下さったと思うものの、これが「これがおもちゃ絵だ」だけであれば、日本近世以来のおもちゃ絵についてご存知の方は全く別なものを想像されたと思う。

そのおもちゃ絵であるが、前川久太郎氏はおもちゃ絵とは「一枚刷りの子供用錦絵」と定義している(8)。前川氏によれば、大阪ではお馴染みの立版古もおもちゃ絵で、寛政年間(1789—1801)に“組上げ”とよばれるおもちゃ絵が出現したが、それが立版古に当たるといふ。立版古について元関西大学教授肥田皓三氏の詳細な説明があるのでその一部を紹介する。

「たてはんこ」〔立版古、立版行などと表記する。「は」を濁音にして「たてばんこ」ともいう。〕は、浮世絵版画〔錦絵〕のおもちゃ絵の一種で、切り抜いて組み立てることが出

来るように、あらかじめ、人物や家屋などを描いた錦絵を、ハサミで裁ち、糊で張り合わせて、台紙の上に芝居の舞台面のように組み立てる。出来上がったその作品を、夕涼みの床机の上、または揚げ店の上に蠟燭の火をともしとして飾る。江戸時代から大正の中ごろまで、子どもの夏の遊びとして大いに流行した遊戯玩具であった。」「たてはんこ」は、正しくは「切組灯籠」または「組み上げ灯籠」といい、もともとお盆の供養に作られる灯籠が、江戸時代の中ごろに玩具化したのが起源で、以後、浮世絵師の手で多くの作品が作り出された。」(9)

一方上野晴朗氏は「子供向け手摺り版画の、決してすべてをおもちゃ絵と言わせたものとは思わない」としながら、おもちゃ絵は美しい言葉であり「わが国独自に発達した純日本式の産物」であると紹介し、「おもちゃというのはモテアソビで」「モテアソビは、手あそびものともいわれていた。江戸の絵草紙の引き札などには、おもちゃを現わすものは手遊物という表現が多く、その多くは季節の祭りや年中行事などに結びついたもので、たまには万翫物類がんぶつなどという言葉も見かける。」と述べ、吉田暎二氏の定義「おもちゃ絵は、子供の手遊び用に描かれた版画を指している。その種類は千差万別であるが、いずれも子供の享楽のために、題材が選ばれていることに変わりはない。」を紹介し、おもちゃ絵の発生は相当に古いが、「いわゆるおもちゃ絵として、版画史に位置をしめるのほどに一群をなしたのは、安政前後から明治にかけてのことであった。」としている(10)。

権田保之助は「玩具絵の話」で、世の中には玩具おもちゃを描いたものは何でも玩具絵おもちゃえと考え、「其為めに往々玩具を描いた刷り物例えば是真や椿山の如きものまでも、之を玩具絵おもちゃえとして見て居るので」あるが、それは「玩具の絵おもちゃ」であるとし、玩具絵は鑑賞の主体が子供であり版画で作られたものと言う。更に玩具絵の第1義は「子供の享楽の目的に協かなうもの」でそれは「武者絵、姉さん絵」などである。第2義は「他に主要目的が有って、夫れが又享楽の対照物となるもの」で「疱瘡絵、教訓絵、名馬尽し、虫尽し」などであると言う(11)。玩具絵は安政(1854)前後から盛んになり、明治維新まで発達し、維新以後他の版画は凋落し、玩具絵の天才芳藤がいて玩具絵は生き残ったが、印刷物の変遷と絵具の粗悪が原因で1877(明治10)年辺りを最後として滅亡し、それ以降のものは芸術的価値がないものとなった説明している。

また有坂与太郎(明治29年生。本名正輔。大正から昭和期の郷土玩具研究家。)は『おしゃぶり』古代編の解説で、「おもちゃ絵とは好事者間で勝手に呼ばれてゐる名称であつて、事実上おもちゃ絵といふ名目のあつた訳ではなく、畢竟は児童向きの錦絵にほかなりませ

ん。」と解説している(12)。

次に巨泉の立版古の思い出を紹介する。

「又立版古、(大阪では組絵とも言う)劇の一場面を錦絵摺りにしたもので、是れに裏打ちをなし、人物、背景等何れも合印が附してあるので、此合印に合わせて板の上に貼りつけられれば其場面が出来上る仕組みになっている。是れは、カナリ古いもので、一枚もの、二枚もの、三枚ものから、五枚位いの大物も出来ていた。組み上がったものは、夕涼みの縁台に持ち出し、商家などでは店先きに出して置いたもので、近所の子供等は集って来てワイワイと騒ぐのである。是れにも、前記のヒョーソク(筆者注:以下巨泉の説明、「土製のヒョーソクは灯心幾筋か、又は糸を幾筋か束ねて中央に差し込み、種油を注いで点ずる土器」)に灯火を点じ、中にも雨は銀線を幾筋も斜に引っ張ったものもあり、大がかりのものには、廻り道具、即ち芝居の廻り舞台を其儘模して場面を時々変えて見せたものもあった。」(13)



「小摺りのおもちゃ絵」(図7)



「切小絵」(図8)

巨泉が小さいころ遊んだ「小摺りのおもちゃ絵」について『人魚』6号で紹介している。ページに小摺りのおもちゃ絵の一片が貼り付けてある。左図の猫の小摺りのおもちゃ絵はタテ3.7cm×ヨコ2.7cmの小さなものである。

小摺りを切り抜いて小箱に貼ったり、中には立版行式のものがあってそれは裏打ちをして切り抜き、それぞれの合印にあわせて薄板にはる。団扇屋や小間物店があつて、小さな屋台を作って並べ軒先に持ち出して小砂利をお金に見立てて「商い遊び」をしたと言う。大阪でも明治14、5年ころまでは毎月新しいものが出版された。東京では歌川芳藤が、大阪では長谷川貞信、長谷川小信、歌川芳信、笹木芳光が流行期に描いたと書いている。ここにいう貞信は初代の長男、二代貞信、小信は二代小信で二代貞信の長男であろう。また笹木芳光は巨泉の師中井芳瀧の実弟で嘉造のことである(14)。「我が大阪のものには柀四つ

切りで立絵又は横絵、二つ割、三つ割、六つ、十二、二十四、三十二、四十八割や或は九十六に区分した細かいものもできていた、模様はのぞきからくり、猫芝居、犬芝居、化物づくし」（筆者注：以下は注記に譲る）などと様々な模様を列記している(15)。

雑誌『此花』が切小絵(図8)を紹介している。「天明の末頃より盛んに行われたものらしい、今現存して居る古絵中にも、其頃の川勝派歌川派絵師の筆に成ったものと認むべきものが多くある、もとより子供の玩弄たる千代紙に過ぎないが、大阪の浮世絵師が発明したという立版古、即ち切組灯籠絵などは、此切小絵の進化したものと見てよ可ろう。」この記事は特に大きさなどには触れていないが、巨泉が遊んだ小摺りのおもちゃ絵の原型となったものだろうか(16)。

おもちゃ絵は維新後に流行したと上野氏は説明しているが、芸術的価値はさて置くとして、1877(明治10)年生まれの巨泉にはお馴染みの遊び道具であった。

巨泉の著作に“おもちゃ絵”と付くのは『巨泉おもちゃ絵集』のみで、『おもちゃ百種』『おもちゃ国絵図』『おもちゃ十二支』などあとは全て“おもちゃ”である。巨泉は近世以来のおもちゃ絵を知っていたのでおもちゃ絵とタイトルを付けたのは1冊に止めたのかも知れない。巨泉自身玩具の絵をおもちゃ絵と書いている場合もあるが、1926(大正15)年5月に大阪三越呉服店で開催したおもちゃ絵の展覧会名は「巨泉玩具絵展覧会」としている。

我々が使った意味のおもちゃ絵について、民俗玩具研究家奥村寛純氏は巨泉の復刻版『おもちゃ画譜』の解題「おもちゃ絵と川崎巨泉画伯」で次のような説明をされている。

「こゝに言う「おもちゃ絵」というのは(中略)古くから日本各地に伝わってきた郷土玩具の銜いのない淳僕な味にひかれて、それ等を描いたもので、いわばおもちゃの写生画である。肉筆画もあるが、版画にして何枚も作られたものもあり、それが更にきり絵、はり絵などの新しい試みも見られ、時には収録され冊子にしたりもする。」(17)

今回我々は敢えてその“おもちゃ絵”を使ってタイトルにインパクトを持たせたつもりであったが、その意味は「玩具の絵」、「おもちゃの写生画」であって、「一枚刷りの子供用錦絵」という意味での“おもちゃ絵”ではなかった。

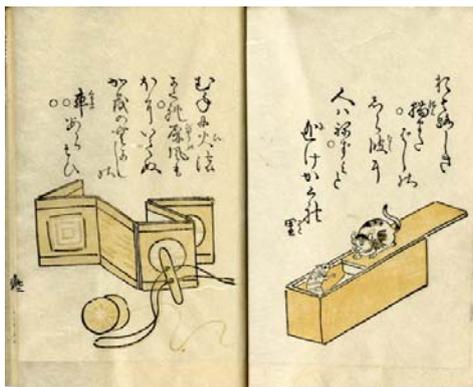
ここでも「玩具の絵」「おもちゃの写生画」という意味で“おもちゃ絵”という言葉を使用する。

#### 1-4. おもちゃ絵(玩具の絵)の始まり

巨泉のおもちゃ絵は玩具の絵であったとしても、それは子供に向って描かれたものかと

いえばそうではなく大人たち、巨泉も使った大供<sup>おおども</sup>かもしれない。(大供は1909(明治42)年、清水晴風、林若樹、久留島武彦らが「人形玩具に関する知識」の交換会として作った大供会に由来する。その機関誌が「大供」だった(18)。人形玩具を愛する大供(おとな)に向け出版され、あるいは自筆のおもちゃ絵を販売した。

巨泉が自画のおもちゃ絵展を最初に開いたのは1916(大正5)年である。それを『日本印刷界』大正5年3月号の記事は「巨泉氏道楽的なる」と表現していて、世間はまだ図案家巨泉の余技と見ていたのである(19)。2日間だけの展示会であったが好評で、おもちゃ絵に対する世間の関心の高さを確認する形になった。そして2年後の1918(大正7)年に最初のおもちゃ絵集『巨泉おもちゃ絵集』を版行したのである。



『江都二色』 (図9)

ここでおもちゃ絵と言っているいわゆる「玩具の絵」、それを集めた玩具絵本が世に出た始めは、江戸期の1773(安永2)年に出版された『江都二色』<sup>えどにしき</sup>であると言う。木村仙秀(明治18年生。明治から昭和期の江戸文学・風俗研究家。)によれば編者は卯雲で、おもちゃ絵は北尾重政が描いた。卯雲は本名木室七左衛門という武士で、白鯉館卯雲と名乗る。江戸の狂歌の先覚者

・天明狂歌壇の長老であった。蜀山人が随筆『奴師<sup>やっこだこ</sup>芳之』で卯雲の狂歌を賞賛したという。出版年から重政は江戸の小伝馬町の書肆・須原屋三郎兵衛の長男で、号を碧水、紅翠軒などと称した浮世絵師・初代重政である(20)。山東京伝(政演)や鋏形蕙斎(政美)は重政の弟子である。なお『江都二色』<sup>えどにしき</sup>の解説には、仙秀の稀書複製会刊行『稀書解説第七編上』や「『江都二色』の編者」がある(21)。書名の『江都二色』<sup>えどにしき</sup>とはどのような意味なのか。仙秀が引用した柳亭種彦の考証随筆『還魂紙料』にそれがある。「古き新しきを分かつたず、それとかれと二色<sup>ふたいろ</sup>つつあつめて江都二色<sup>えどにしき</sup>と題<sup>よべり</sup>り」(22)。掲載のおもちゃは「編者卯雲が幼時目撃したものばかりで」あり、当時のおもちゃ集めた書物として大切なものだ、とは仙秀の言葉である。

この『江都二色』<sup>えどにしき</sup>はいわゆる江戸の文人たちの趣味・遊びの中から生まれたものである。白鯉館卯雲こと木室七左衛門は大田南畝や朱楽菅江同様典型的な文人である。大沼宜

規氏によれば「安永・天明年間には、狂歌の会から発展するかたちで「宝合会」も開かれるようになっていく。」とされ(23)、狂歌集団が文人趣味の会をリードしていたから、恐らく卯雲周辺にもおもちゃを趣味とする仲間があり、絵師重政もその一人であったのではないだろうか。安永の「宝合会」は塙保己一、大田南畝、唐衣橋洲らが「宝に似て非なる物を持ち寄り、その由来をもっともらしくこじつけた文を披露」したものであり、その成立が1773(安永2)年とも1774(安永3)年ともいわれ、それが『江戸二色』の版行年代と一緒であるのは偶然ではなく、当時に様々な趣味の会が盛んであったと考える材料となるのではないか(24)。また1783(天明3)年4月25日の「宝合会」には、『江戸二色』の浮世絵師北尾重政の弟子たち、北尾政演(山東京伝)や北尾政美(鋏形蕙斎)が展示物を持ち寄り、『狂文宝合記』の挿絵も描いている。浮世絵師としては他に喜多川歌麿、弟子の行麿がいた(25)。狂歌集団と浮世絵師の交流も注目される。

因みにこの『江戸二色』を当館は3冊所蔵している。米山堂が出版した稀書複製会復刻版2冊と有坂与太郎が狂歌の翻刻と解説を付し、郷土玩具研究会が発行した1冊である。

1924(大正13)年1月28日発行の稀書複製会版は和紙・和装。寸法タテ16.4cm×ヨコ11.5cm。第3期第15回配本。印行300部の内第103号は本文が15丁から始まり27丁の丁付けで終わるもので奥付も欠けている。仙秀の解説にもこの復刻版(武蔵屋本)は15丁から始まり27丁に終わるとしている。次に1931(昭和6)年11月28日発行の稀書複製会版は和紙・和装。寸法タテ16.4cm×ヨコ11.5cm。第7期第13回配本。印行500部の内第166号は、序文の前に「円圏内に一老人が若き画家に口伝するさまを画いてゐる」図が挿入され、奥付もある。全27丁。これが「昭和6年に至って、稀書複製会がその完本を大阪の某氏から得た。」本であろう(26)。

有坂与太郎が解説・翻刻した有坂版ともいべき『江戸二色』は1930(昭和5)年4月18日発行された。この本について仙秀は「墨線だけを木版とし手彩色で行ってゐるので、原本の趣きが少しも見出されない。」という(27)。有坂版は手彩色で色付けをしたから原本の趣を失ったのだろうが、多色であることもその要因で、さらには玩具の顔つきも原本に比べて下手である。本文は13丁(丁付けなし)、解説9丁。寸法タテ18.5cm×ヨコ13cm。解説で有坂は「二色づゝ取り合わせて描かれた玩具の種々相こそ、実に本書の貴重視せられる所以である。享保時より安永までの児童生活を知るに唯一は無二の好資料であり、而もその内の数種が、なほ今日まで残存される事を知れば、何人も覚えぬ微笑を禁ぜられぬであろう。」と記している(28)。



『うなゐの友』絵：清水晴風（図 10）

維新後の 1891(明治 24)年玩具絵本『うなゐの友』の初編が刊行された。『うなゐの友』の初編のあとがきによれば、清水晴風(嘉永 4 年生。“玩具博士”と呼ばれた玩具研究家。)が 1880(明治 13)年の春、竹内久遠(本名九一、号九遠。安政 4 年生。明治の彫刻家。東京美術学校教授。)の向島の竹馬会に出席しそこで「手遊乃品」(筆者注：おもちゃ)を見て美術に目覚め、友を通じあるいは自ら日本各地の手遊品を集め始めた。蒐集を始めてから 12 年、数は 300 点を超え、種類は 100 余種になった。それを眺め暮らしていたが、「木村ぬし」(筆者注：木村仙秀か)に勧められ 1 人で楽しむよりも広く人々に知って欲しいと出版をしたのである。

『うなゐの友』は清水晴風の死後、西沢笛畝(明治 22 年生。旧姓石川、本名昂一。日本画家。大正昭和期の人形玩具の蒐集・研究家。)が引継ぎ、1914(大正 13)年に全 10 編をもって完成した。『うなゐの友』は日本各地の郷土玩具を絵に描いて残そうとした仕事であり、玩具絵の販売が目的ではない。なお『うなゐの友』の「うなゐ」とは、「古語で子どもの髪形(髻髪)をいう、ひいては子どもの意となり、「うなゐの友」とは、幼い子供の友、つまり「おもちゃ」を指す言葉である。」(29)

#### 1-5. おもちゃ絵を描いた人たち

巨泉は 1925(大正 14)年、郷土玩具雑誌『鳩笛』創刊号に「玩具の絵について」(30)を書きおもちゃ絵を描いた人たちに言及した。晴風の『うなゐの友』を評して世間が玩具の絵に注目し始めたのはなんとといっても『うなゐの友』が広がったことによること。『うなゐの友』には「写生にもものたりない処や、名称の間違っている処はあるとしても」晴風翁は「土俗玩具の趣味を一般に紹介した第一人者」であるとしている。

写生がものたりないと書かれた晴風であるが、久保田米所(明治 7 年生。本名満明。画家、号米斎。米僊の長男。)によれば、晴風は自分の絵こそ「真の玩具の絵」と自負し、自分は

画家ではないから技術は劣るが、玩具作者も絵を描く自分も素人だからお互い会い通じ合  
って本物のおもちゃ絵ができる、玩具の絵に技術は反って邪魔をすると語ったという(31)。

その後名前が挙がるのは淡島寒月である。寒月のおもちゃ絵は「翁一流の俳書風の玩  
具絵」と紹介している。次に西沢笛畝の『雛百種』の書名を掲出し、その作品の価値を高  
く評価している。ところが笛畝が引き継いだ『うなゐの友』の続編には名称の間違いが多  
く作品考証に問題ありとし、出版社の意向では仕方がないが、晴風の『うなゐの友』とは  
別個の物として出版したほうが良かったとした。この言葉は笛畝が晴風の折角の名著『う  
なゐの友』を貶めたと言うことであろう。この巨泉の反感を深読みすると、晴風が画材に  
した玩具の多くは晴風自ら多年に亘り蒐集・研究したものであるが、笛畝(笛畝は西沢家の  
入婿)が描いた『うなゐの友』の玩具は養父西沢仙湖が蒐集した玩具を素材にしたものであ  
り、笛畝自身が蒐集し研究したものではないから結局貴方は付け焼刃だね、とこうい  
たいのだろう。

晴風と笛畝とでは解説にも違いがある。晴風の『うなゐの友』を晴風版といおう。晴風  
版はおもちゃ絵に簡単な解説が付してある。一方笛畝版は、おもちゃ絵とは別に巻頭に解  
説ページを設け本格的なおもちゃ画譜を志向している。体裁を整えた笛畝版であったが巨  
泉は気に入らなかった。

そして寒月の『おもちゃ百種』、『おもちゃ千種』、巨泉自身のおもちゃ版画集、『おも  
ちゃ千種』、「おもちゃ箱」、田中緑紅の「ステンシル版のおもちゃ絵」、山内神斧『壽壽』な  
どは全て『うなゐの友』にヒントを得たもので、それは一般好事家の周知のことである  
という。『うなゐの友』以降のおもちゃ絵集はすべて『うなゐの友』を親として生まれた子供  
ということのようである。

先の久保田米所はおもちゃ絵の作者として、晴風の他に人形を好んで描いたが世間であ  
まり知られていないからと、京都の森寛齋と土佐派の画家名古屋の大石真虎の名を挙げて  
いる。寛齋は御所人形を描き、真虎には名古屋地方の玩具を写した玩具絵巻があるという  
(32)。また奥村寛純氏は復刻版『おもちゃ画譜』の解題「おもちゃ絵と川崎巨泉画伯」で  
おもちゃ絵を描いた人として、清水晴風、淡島寒月、巖谷小波、川崎巨泉、清水桂月、西  
沢笛畝、宮尾しげお、武井武雄の名前を挙げている。そして版画の中に郷土玩具を取り上  
げた画家として棟方志功、徳力富吉郎、榊岡良といった人たちいると記している(33)。

淡島寒月は巨泉のおもちゃ絵版行に対する東京における最大の理解者であり協力者であ

った。巨泉にとってはおもちゃ絵の先達として、またその人柄と共に敬愛すべき人物であっただろう。寒月の著書『梵雲庵雑記』に内田魯庵の「淡島寒月翁のこと」がある。それによれば寒月は晩年になって玩具を蒐集し始め、その数は3000点ほどあった、『オモチャ千種』描いて頒布した、また、その蒐集範囲は外国のものが多く意外なものを所蔵したなどと書かれている。「父親は、力の画家椿岳で、浅草絵と言ふのを描いて居たが、それを真似て、天性の器用さから、翁も色々絵を描いて矢張バサラ絵と呼んで居た。元来落書が好きで、家の中には、所きはらず落書したり紙を貼りつけていた。」と生前の様子を伝えている(34)。

『梵雲庵雑記』の「編纂を終へて」で斉藤昌三が「大正末期に『椿岳漫画』の上梓があった筈に記憶している。」と書いた、その『椿岳漫画』は大阪市南区にあった木村旦水(旦水は巨泉のおもちゃ絵の同好の士)の出版社兼書店“だるまや”が1919(大正8)年4月28日付けで発行したものである。その絵の奔放な筆致には鳥羽絵風に手足の長いものもあり、描線の長短、連続と断絶の複雑な直線と円弧の筆跡は、おもちゃ絵として整った描線を見慣れた目には絵が画面から飛び出すようであり、椿岳の絵を見た後で寒月のおもちゃ絵を見ると整い過ぎているという印象さえ受けるのである。

淡島寒月が日本と外国の犬のおもちゃを描いたおもちゃ絵集に『十二支画帖 犬乃巻』(伊勢辰商店 大正10年12月11日発行)がある。この本には寒月と親交があったシカゴ大学の人類学者で日本では御札博士で通っていたフレデリック・スタールや、斉藤昌三がインドの王族と呼んだ Gureharn Singh の寄せ書きがある。以下はスタールの文章である。

“Kangetsu shows constant versatility, industry and skill in his dogs as in his earlier interesting works. May he long keep at his art. Taisho 10. 5. 20. Frederick Starr”

1926(大正15)年2月23日に寒月が没した後、同じ年の9月19日大阪の天下茶屋・楽園で追悼会が行われた(35)。主催したのは蘆田止水。蘆田は本名安一。大正から昭和前期の大阪を代表する趣味家の1人。身辺雑記風の個人誌『和多久志』を発行した。

『和多久志』は1920(大正9)年11月創刊、創刊号は秋の巻。これには淡島寒月や三田平凡寺(趣味山平凡寺)が寄稿している。本名は安一と書いてヤスカズだと紹介し、「私の道楽」で四酔山温学寺(これは三田平凡寺が開祖の趣味人の会「我楽他宗」の山号と末寺名。1919(大正8)年に会員を募集。会員はそれぞれ止水のように山号と末寺名を自称した。止水の本尊は観世音菩薩。天下茶屋の蘆田別邸には「日本、支那、印度、その他各国に渉る

土俗玩具等の蒐集を以て堂内に充つ。」と書いている。当館はこの雑誌を 11 号夏の巻、1928(昭和 3)年 8 月発行まで 11 冊所蔵するが、このタテ 15cm×ヨコ 11cm の小型の雑誌には、カットや表紙絵を大阪の竹久夢二とも称される大正期の抒情画家宇崎純一(ウザキ・スミカズ)や大阪の女流日本画家木谷千種が描いている。これは止水の自慢かもしれない。そのスミカズについて、肥田皓三氏は「宇崎純一の画業」で「スミカズの画風は、従来の写実的な日本画風の挿絵のしきたりを破った、自由と呼ぶのがふさわしいスケッチ風の大胆な省筆に特色がある。」、またスミカズのエハガキは竹久夢二や加藤まさをの作品に「劣らぬ魅力に富む出来ばえのものである。」と紹介されている(36)。我楽他宗仲間では河村目呂二が止水の似顔絵や第 7 号のカット・表紙絵を描いている(37)。

止水の実姉の夫である永田好三郎(有翠)も大阪の著名な趣味家であった。止水は同じ趣味人として有翠に好意を寄せた。有翠は巨泉のおもちゃ絵の同好の士でもあった。有翠は巨泉の『おもちゃ千種』がまだ刊行中の 1921(大正 10)年 9 月に死去し、最大の理解者の 1 人を亡くした無念を巨泉は『人魚』2 号に吐露している。さて止水は寒月をあらゆる趣味家の最高峰の人物としてその全人間像を愛し尊敬した。それ故この追悼会を発案したのである。寒月追悼会の発起人は石割松太郎、濱忠次郎、友野祐三郎、渡辺虹衣、川崎巨泉、高安月郊、伊達南海、中井浩水、南木萍水、山田新月、蘆田止水、木村旦水、三宅吉之助、三好米吉である。ここに参加した虹衣・萍水・旦水・吉之助・米吉は皆巨泉のおもちゃ絵の愛好者である。止水の「翁がどんなに広い趣味を持っていたか、どんなに深い造詣があったか、どんなに高い人格者であったか」今更言うまでもないだろうと言う寒月を敬慕する言葉は、参加者全員の思いであろう。御札博士フレデリック・スタールも前橋通訳を伴い参加している。当日の写真を見ると 24 名が会したようだ(38)。

竹久夢二とおもちゃを結びつける人はそう多くはないだろう。児童文化史研究家アン・ヘリング氏は夢二が「郷土玩具、伝統玩具に対する一般の関心が最もうすかった時代に、夢二は古くから伝わるおもちゃの価値を、明治の末期にすでに見直していた文化人の一人であった。」とし、「巖谷小波、『うなゐの友』の清水晴風、西沢笛畝、有坂与太郎などと並んで、竹久夢二を郷土玩具の再発見運動の先駆者の一人とみなすことは、十分可能である。」と評価し、「夢二が子供のための挿絵などに伝統玩具を積極的に取り入れようとした点は、もう少し評価してよさそうである。」という(39)。

巨泉と夢二。夢二は巨泉より 7 歳下の 1884(明治 17)年生まれ。2 人の共通点を挙げると

すれば、共にデザインに関わりおもちゃに関心を持ち、方法は違うが玩具を図画化したということだろう。また共通の知人に大阪・柳屋書店三好米吉がいたこともそうである。柳屋は夢二の版画や絵封筒などを販売していた店であり、1921(大正10)年頃夢二は柳屋に出入りしていたというから、巨泉と相知る機会もあったかもしれない(40)。夢二が玩具に関心を寄せそれを描いた行為は、おもちゃ絵による玩具の保存ではないし、巨泉のように玩具を独立した作品として表現しようとしたものでもない。夢二が描こうとした世界に、愛らしい小物・むかし・郷愁などのコードとして取り込まれたのではないだろうか。アン・ヘリング氏が紹介している夢二の『夢二エデホン』に描かれた鳩や猿、雀はイラスト風で大変可愛らしいものである。夢二をその先駆者とするなら、巨泉は運動には関わらないが、結果として郷土玩具の再発見者の1人となったといつてよい。

児童文学者巖谷小波もまたおもちゃ絵を描いた。馬のおもちゃ絵集に『十二支画帖 午の巻』(伊勢辰商店、大正7年9月15日発行)があるが、これはビルマ、インド、ロシア、イギリス、フランス、ドイツ、東京、会津、京都など世界と日本各地の馬の玩具が描かれているものである。横版の彩色木版画である。何故馬なのか。小波の四男巖谷大四が書いた小波伝『波のあしおと菟音』によれば、小さい頃から蒐集癖があった小波は、自身が1870(明治3)年の午歳生まれのこともあり、1906(明治39)年から午歳に因んで古今東西の馬の玩具などを集め始め、1918(大正7)年には1000点を超えたという。蒐集品を展示する千里閣なる建物を寄付で建て、無料で一般公開するという徹底ぶりであった。なお、小波は『巨泉おもちゃ絵集』の第11巻から15巻の題僉を書いた人である(41)。

吉田永光、久保佐四郎、島尻是空のおもちゃ絵が掲載されているのが、広瀬菊雄編『十二支画帖 亥子丑之巻』(伊勢辰商店 大正11年12月8日発行)である。吉田永光は亥(いのしし)、久保佐四郎は子(ねずみ)、島尻是空は丑(うし)を描きそれを一帖にしたものである。これも横版・彩色木版摺りである。

永光については、田中緑紅(明治24年生まれ。郷土玩具研究家・郷土史家。)が1925(大正14)年6月発行『鳩笛』4号の「おもちゃの蒐集(4)」で「東都に於ける羽子板師として特に有名な方です。」「以前午年に百馬会を催し、小さい土俗玩具の馬を百種一ヶ年に渡って配布され大変精巧で、佐四郎人形と陳び賞せられましたものであります。」と紹介している。



“「小型達磨」と「小型夫婦達磨」”(図 11)



“佐四郎氏の描きしもの [起上り 三種]”(図 12)

久保佐四郎(明治5年生。明治から昭和期の人形作家。)が作った達磨が『巨泉玩具帖』第3巻8号15(インターネット「人魚洞文庫データベース」の巻・号・通し番号)に佐四郎作の「小型達磨」と「小型夫婦達磨」として描かれている。小型達磨は画面中央右下の目入りの達磨、夫婦達磨は画面左上のもの。また『玩具帖』第12号18(インターネット「人魚洞文庫データベース」の号・通し番号)には“佐四郎氏の描きしもの [起上り 三種]”として巨泉の模写がある。上図の姉様人形に挟まれた小さな3体の絵がそれである。

島尻是空は日本画家。有坂与太郎の著書、1926(大正15)年、郷土玩具普及会発行の日本玩具集『おしゃぶり』第一編の本の装幀者である。

#### 1-6. 玩具と戦争

おもちゃ絵には古い玩具もあれば新しい玩具もある。その描き方も自由である。古玩を描いたにしても古さをリアルに描いたものではない。それは過去の時代に出来たということであって、おもちゃ絵を見て古玩と判断することは出来ないし、またすることもない。

晴風の絵は真面目な型崩れしない律儀な絵に見える。おもちゃ百種に見る寒月の絵は巨泉の言う俳画風という味わいと、上手とか下手とか分別臭く見ることを嗤うが如く、ただそこにある絵を楽しむ、味わう、良寛の書を見るような気持ちにさせる。巨泉の肉筆画のおもちゃ絵は丸みを帯びた柔らかな線、まるで網の上で焼かれている餅がふくつらと膨らんだ時のような味わいがある。版画になると、初摺のものだろうがその線はもっとしっかりしたものになる、それでも何処かはんなりした雰囲気がある。小波の絵になると、その雰囲気は寒月の父椿岳の漫画のように元気、元気で絵が踊っている。

各人各様のおもちゃ絵を楽しむこと、これは玩具の楽しみ方とはまた違ったものである

う。それは玩具とおもちゃ絵の用途の落差として現われてくる。その極端な例が太平洋戦争時に現れた玩具の戦争協力というアジテーションであった。太平洋戦争が勃発し玩具運動のリーダー有坂与太郎や日本民族玩具協会の有志たちは玩具も進んで戦争遂行に奉仕することを訴えた。大東亜共栄圏の班主として南方アジアに侵攻して行く日本。日本の玩具はもはや郷土玩具ではなく、日本民族の民族玩具となって戦争に奉仕する任務を進んで担おうとした。また一方で民族玩具を唱道した彼らが見た夢は、アジア南方圏の人々の意識を引き上げ、彼らに玩具を提供し、玩具を通じて相互交流を楽しむと言う観念的玩具ロマンチズムを抱き、日本とアジアの玩具楽土を夢みていたのである(42)。

1943(昭和18)年当館が行った巨泉のおもちゃ絵と玩具の展覧会は、玩具を民族芸術という名のもとに有坂の言う戦争遂行に奉仕する道具として展示したものであった。それが、「[1] 人魚洞文庫の展示」で紹介した玩具を神祇(=天皇・万世一系)、武器(=武器)、武者人形(=兵隊)、鬼退治(=鬼畜米英退治)、軍用動物(=忠誠心)、猛獣(=勇猛果敢)、不倒(=神国の負戦神話)、経済力(=経済力)、増産(=増産)、海上輸送(=兵站線・支援)、人形総動員(一億総動員)、大東亜共栄圏及同盟国の12の主題(カッコ内が見立て)に別けて展示したものである。太平洋戦争下における玩具の模範的展覧会である。

巨泉も玩具の南方進出を歓迎した。巨泉もまた南方進出が戦争によって生じていることの是非を問うことはない。玩具を与えることによって現地の子どもたちを未開から「文明の子ども」へと導きたいと願っていたのである(43)。ただし巨泉の共振を有坂と同じイデオロギー圏の響きと考える必要はないが、巨泉の根底には、日本固有の玩具への絶対的信頼があり、それが玩具を絶大化させ、玩具による人間の啓蒙という玩具精神主義的考えを呼び寄せたのであろう。戦争遂行を輔弼する玩具、一方おもちゃ絵は遊び心を映した遊び品としてひたすら平和な時を待っていたのだろうか。

#### 1-7. おもちゃ絵の出版と販売

巨泉が描いたおもちゃ絵は次ぎのような形態で出された。(1)販売形態は一般に書店を通じて販売されたもの、事前に購入者を募り販売したもの、一種の会員制。(2)出版形態は自費出版と出版者による出版(3)書籍の形態は洋装、和装、折帖、軸物など。(4)印刷形態は機械印刷、木版摺り。それと肉筆があった。

会員を事前に募っておもちゃ絵を売るというやり方が何時から始まったのかわからない

が、大正時代には巨泉の他に人形師の久保佐四郎も同様のやり方で人形やおもちゃ絵を頒布していた。1925(大正 14)年 10 月発行の柳屋画廊のカタログ『柳屋』28 号に、巨泉の「十二月玩具絵の会」の案内記事と共に佐四郎の「御殿玩具」と「郷土玩具絵」の頒布会の記事が掲載されている。

巨泉については「現代玩具絵界の権威巨泉川崎氏の肉筆十二ヶ月の玩具絵は諸氏の熱望するところであります今回我々の乞を入れての御揮毫。」とある。佐四郎のおもちゃ絵は、色紙形絹地に原寸大で彩色もそのまま描いたもので、30 枚 1 組。毎月 3 枚宛頒布。入会費 5 円。10 回まで各 5 円で合計 55 円と記載されている。このように当時の玩具趣味家たちにおもちゃ絵や人形を頒布する方法の 1 つとして会員制があった。大正時代のおもちゃ絵の制作方法は木版又は肉筆が主であり、その形態は和紙の一枚ものや、佐四郎の色紙型絹地に描くなど手作りの風合いを味わうもので高度に趣味的であった。だからおもちゃ絵を描いた人たちには最初から石版や機械印刷で出版しようという考えは毛頭なかったと思われる。その意味からも一般書籍のように出版出来るものではなかったし、また趣味性が高く購入層もそう広くはないおもちゃ絵を仮に出版依頼しても、受注しようという出版社は多くはなかった筈である。巨泉のおもちゃ絵で自家版以外の出版は、1 冊を除いてすべて巨泉の強い支援者であった木村且水のだるまやが引き受けている。その形態は和紙和装本であった。

購入者が限定されていたおもちゃ絵であるが、巨泉は 1919(大正 8)年に大阪三越で最初のおもちゃ絵展(恐らくは即売もしたと思われる)を開催している。その後 1925(大正 14)年にも展示会をしている。大正中期から昭和初期にかけてデパートを使ったおもちゃ絵や人形、玩具の販売形態が定着して行き徐々におもちゃ絵が一般に浸透して行ったのであろう。

#### 1-8. 巨泉の自家版

ともかく巨泉はおもちゃ絵を肉筆や木版摺りで出すことに拘っている。例えば毎年干支にちなんで制作したものに「土俗玩具の春懸け軸物会」があった。自筆であるだけに描ききれないと巨泉を嘆げかせた肉筆掛軸頒布会である。

考えてみれば、肉筆で 10 も 20 も同一のおもちゃ絵を描くという行為は写生の優れた技術は言うに及ばず、精神的にも相当な負担であったろう。巨泉は肉筆おもちゃ絵集『おもちゃ千種』を書くに当たり、20 作以上は首がちぎれても描きませんと悲壮な決意表明をし

ているからである(44)。

巨泉の自費出版物（自家版）は彩色、紙の選定など何れも凝った作りになっているが、それは購入者のためではなく、巨泉自身の謂わば自己満足のための作法であろう。自家版を制作する意図について、文章になった巨泉の言葉はないが、版画家武井武雄の次のような私刊本の哲学があったのだろうと想像する。「私刊本とは自分のために一冊を作るものだ。しかし版画と同じように自然に複数出来ざるを得ないものだから、最も印刷効果製作効果のいい部数だけを作って、自家一冊の外は同好の士に頒<sup>わか</sup>つべきだ、というわけである。これが本当の私刊本というものの面目だと思っている。」「読者にうける必要のない、評判などを全く気にしない、自分に飽くまで忠実なもの」これが「私刊本の背骨」でなければならない言う。そして「私刊本は個性的であるべきだ。従って独善的だという非難は甘んじて受けるべきである。」というのである(45)。

巨泉が自家版『おもちゃ千種』（1921(大正 10)年)に書いた言葉がある。おもちゃ千種を描く発意は、日本伝来の土俗玩具が西洋かぶれの模造品によって駆逐されていくのは日本人として残念至極である、せめて土俗玩具、絵馬、縁起物を描いて残そうということにあった。

巨泉のこの企てに賛同してくれる同好の士を全国に募り自家製作を開始したのであったが、この企ては武井武雄が言う本来は「自分のための一冊」であり「自分に飽くまで忠実なもの」を作品化しそれを頒布する行為であろう。作品の購入者は同時に金銭的支援者という関係性も成立することになるのである。

次のような例があった。巨泉の代表的自家出版物に『郷土の光』がある。これの刊行開始が 1916(大正 15)年 9 月、完成が 1928(昭和 3)年 5 月で 1 年 9 ヶ月の間毎月刊行した。『おもちゃ千種』も 2 年、巨泉の自家版は容易く出来るものではない。作品完成まではその作業に心を砕くわけで、収入もままならないこともあったと思われる。『郷土の光』が第 9 集まで出たとき、巨泉は出版のための資金繰りに『巨泉漫筆おもちゃ箱』の購入依頼を会員に申し出ている。おもちゃ箱は 200 部限定で頒布し若干残部があったのだろう。「一時払い、分売ともに一方ならぬ御援助をお願いした事を厚く御礼申し上げます。」と個人誌『人魚』6 号の「郷土の光について」に書いている(46)。このように各地に散在する巨泉の同好の士=会員は篤く巨泉の芸術活動を支えたのである。

自家版の1つに1919(大正8)年の『巨泉おもちゃ絵集』がある。毎月5枚ずつ発表し、20ヶ月で100枚の作品となった。最終的には5帖にまとめられた。解説帖は序文を渡辺虹衣が書き、残りの4帖の題簽は淡島寒月、巖谷小波、水落露石、中井浩水などが書いた。寒月・小波・浩水は無論玩具趣味の人であるが、露石はどうなのか。巨泉が露石の聴蛙亭を来訪したのが1907(明治40)年3月17日のこと。露石とは以前からの知人であった(47)。

巨泉がおもちゃ絵に用いた用紙は錦絵の寸法を基準にしている。顔料も錦絵に用いたものを使用したと考えられる。この本の寸法は奉書二ツ切りで縦絵。タテ約49cm×ヨコ約24cmの大きさである。「木版色摺の画面の一部を、群青、緑青、朱、丹、胡粉等で加筆し」「特に本金泥を用いて模様」などが描かれている(48)。これは木版印刷であったから印刷部数は限定300部であった。事情を明かしていないが、巨泉はこの版木を叩き割って絶版にした。巨泉の激しい性格の一端を物語る。絶版により古書の相場が上がったことを喜んでいもいる。版画の場合、版木の保存が大変で彫師の2階を占領しているのを気の毒がっているし、また自宅に持ち帰っても保管ができない、結局処分して絶版にすることとなる。

この絵本の頒布当初の価格は、おもちゃ絵5枚に解説付きで1部1円であった。合計100枚で総額20円である。当時の1円は現在の価格で5000円ほどになるのだろうか。すると合計10万円である。これはまさに豪華本である。昭和初期に巨泉は『巨泉おもちゃ絵集』の残部の3部の内2部を1部35円で手放しても良いとっている。手放すとは巨泉のいい方に従えばお嫁入りさせるである。これは恐らく和装にして5帖にまとめた物を指すのだろう。コーヒー一杯が10銭のころである。巨泉曰く「お安いか、お高いか、其れは望まれる方の思召し」であると(49)。

『巨泉漫筆おもちゃ箱』(以下『おもちゃ箱』とする)は関東大震災後の1914(大正13)年に刊行された。1913(大正12)年9月の関東大震災により東京の玩具界と貴重な玩具は壊滅的状态となった。しかもこの時代すでに外国製輸入玩具の日本への流入は時の勢いであった。外国製玩具の輸入の趨勢と失われ行く祖先が残した純日本の玩具。その危機意識が『おもちゃ箱』を刊行した最大の動機であった。

純日本の玩具と言うものは「我國民性を發揮したものであって、郷土風俗や、幾多の面白い口碑伝説を取材として其れがいろいろの形<sup>ち</sup>のものに作りあげられて」いる。そして玩具や縁起物には小さいながらも豊かな芸術味があり、色彩の調和、紋様には「純日本の気分」が現れている。これら純日本の玩具が今後永続することは不可能であるし、復興す

るにしても「洋風を加味」したものになるだろう。だから巨泉は「多年日本玩具蒐集研究の傍ら漫筆と言った風に殆ど日課のように」描いていた「玩具絵」の中から面白そうなものを選んで木版画としたのであった(50)。

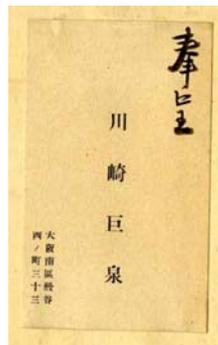
ここに述べられているのが巨泉の玩具観でありその立脚点であろう。巨泉にとって最も理想的な玩具とは近世期の日本が生み出した純国産玩具であった。それが玩具の評価基準の原点である。巨泉はこんなことを書いている。

「古い我国の郷土玩具も、どうやら滅亡の時期に達して来ました。近い内には、其れ等のものが、純骨董品になってしまって、目の前に見るものは何れも、西洋風のピカピカした、私等の嫌いなものゝみになってしまうだろうと思われてなりません。」(51)

西洋風のピカピカとは評価基準の原点から最もマイナスの地点にある玩具であり、西洋かぶれの模造品である。そのマイナス評価の範疇には、例えば上辺だけで内容のない文化主義や名前だけの文化住宅そしてモダンガールの醜態もそうであり、巨泉に倣って敷衍すれば、物質的欲望を求めるのに汲々として、趣味を忘れた人間たちと、物まねが横行し、創造性を失った玩具を作って恥じない人びとも当然含まれるのである。それはまた都会と田舎、キネマと玩具など前者を否定し後者を肯定する二つの対立軸として巨泉の中に意識化されたのである。そして巨泉は時代の趨勢から半ばあきらめと新しい玩具への期待という2つの極の間で揺れ動く自分を意識しながら、新旧の玩具を眺めていたのであった。



『巨泉漫筆おもちゃ箱』(図 13)



巨泉の名刺(図 14)

なお右上の写真は当館が所蔵する『おもちゃ箱』(一之二)のあそび紙に貼付された“奉呈 川崎巨泉 大阪南区鰻谷西ノ町三十三”の名刺である。巨泉は『人魚』5号の「玩具研究資料献本」で1915(大正14)年4月に『おもちゃ箱』絶版の記念に『おもちゃ箱』100枚箱入りを玩具資料として保存のため以下の施設に寄贈している。名刺はその時のものである。

東京帝室博物館、奈良帝室博物館、京都恩賜博物館、東京帝国大学附属図書館、東京帝国図書館、東京早稲田大学図書館、京都府立京都図書館、大阪府立図書館、東京美術学校、東京女子美術学校、京都高等工芸学校の11ヶ所であった。ただし某地の図書館に送ったが何の便りもなくうやむやになって不明になってしまったのか物足りないが、「誰か玩具好きの館員の手に渡って、窃かに研究材料になってゐるのでしょうか。」とは巨泉の皮肉であろうか(52)。図書館司書として耳の痛い話しである。なお施設の固有名詞は巨泉が書いたママとした。

さてこの本は巨泉漫筆おもちゃ箱頒布会刊行の名前で頒布された。まず全国の趣味家に趣意書を出し会員となってもらい、また書店に取り扱いを以てする形で本を捌いていった。このおもちゃ絵の用紙は生漉厚口の大広奉書の四つ切型。生漉大奉書は「儀式用の包紙、目録用紙」として用い、「上品は純楮製」である(53)。無論巨泉は楮100%を使用したであろう。大広奉書の四つ切りは錦絵に使われ、その肉厚の紙は永年の保存に相応しいものである。寸法はタテ約22cm×ヨコ約29cmである。木版着色摺り。「是は玩具を絵画化したので其物に応じた景物の花とか、又は器物」などを絵に配したものである(54)。またおもちゃ絵の落款には笛洲作の「人魚洞」、香迂作の「芳齋」・「碧水居主人」、「巨泉之印」、「碧」の5つを使っている。限定200部のところ130部は捌けた。これも版木保管上の問題から絶版としたが、その際版木オモ版のみで小箱を作って希望者に分けたいと洒落た提案をしている。オモ版とは主版と書き墨線版のことで「木版画の基本をなす版のこと」である(55)。この『おもちゃ箱』のおもちゃ絵は羽二重友禅、封筒、ポチ袋などに使われたという。無論巨泉は使用料を取っていたと思われるがそこまでは明かしていない。これも昭和初期に30円で販売すると宣伝している。

『おもちゃ千種』は淡島寒月の『おもちゃ千種』に倣って巨泉が1921(大正10)年に企画したものである。限定20部、毎月15枚を描いて頒布した。用紙は別漉大形奉書二つ折り。タテ約39cm×ヨコ約26cmの大きさである。これは版画を用いず全てが手書きのおもちゃ絵で、完成に2年を費やしたのである。

#### 1-10. 巨泉を支えた同好の士というネットワーク

結局『おもちゃ千種』を求めた同好の士は18名、巨泉は趣味家が多い東京から申し込みがないと嘆いたが最終的には東京からもあったという。巨泉は『人魚』1号で申し込み順

に名前を列記したが、名古屋は早川、徳島は芝、長崎は松田、本山桂川、京都は山崎、六甲の小澤と言った人たちと、大阪では永田有翠、木村旦水、三宅吉之助らが顧客だった。この他にこの企てに協力したのは、淡島寒月、渡辺虹衣。販売に協力した店として柳屋書店(三好米吉)、吾八(山内神斧)、郷土趣味社(田中緑紅)、おもしろや(東京にあった郷土玩具店)などが挙げられる(56)。巨泉は協力者からは描くおもちゃの提供も受けた。だから巨泉のおもちゃ絵はおもちゃ絵を描いたのは巨泉1人であるが、実は対象となった玩具を巨泉に提供し、または寄贈した全国の玩具愛好家たちの協力なしには成立しなかったとあってよい。先に個人名を挙げた木村旦水、本山桂川は販売の方面でもだるまや、土の鈴会として協力している。

巨泉のおもちゃ絵の頒布には巨泉を囲むおもちゃ絵ネットワークともいべき同好の士が存在していた。それが上記の人と店であったが、他にも大阪には青賢肇、青山一步、南木萍水、村松百兎庵、西田静波、梅谷紫翠、肥田溪楓らがいたし、京都の木戸忠太郎らも巨泉のおもちゃ絵頒布を支援する核になった人たちであろう。ここに名前を挙げた人を簡単に紹介すれば、青賢肇は本名青山賢肇、大阪朝日新聞社の調査部に勤務した人。『苔瓦堂日録』という日記を残した。青山一步は本名冬樹、放送局に勤務した。南木萍水は本名芳太郎、郷土雑誌『上方』を主宰、南木コレクションが大坂城天守閣にある。村松百兎庵は本名茂、大阪国文社に勤務した。西田静波は本名清次郎、職業は棕櫚商。梅谷紫翠は本名秀文、歯科医。木村旦水は本名助次郎、書店兼出版社“だるまや”を経営。三宅吉之助は宇津保文庫主宰。書籍コレクター。本山桂川は長崎の民俗研究家。巨泉のおもちゃ絵展を長崎で開いた。三好米吉は柳屋書店(後に屋号を柳屋画廊に変える)を経営。大阪で竹久夢二の作品を販売した。山内神斧は本名金三郎、東京美術学校卒業、美術工芸品販売店吾八や梅田書房を経営。永田有翠は本名好三郎、趣味人として著名、蘆田止水は義理の弟。肥田溪楓は本名弥一郎。肥田家の宗家(本家)を継ぎ、虎屋銀行、虎屋信託の取締役、大阪聚文社の監査役などを務めた趣味人。掬水庵と号し「楓文庫」を建て、個人の趣味誌『あのな』を発行した。渡辺虹衣は本名源三、骨董研究家。

この人たちの他に小谷方明氏は巨泉を支えた「おもちゃ愛好家」として次の人たちの名前を挙げている。小谷方明氏は大阪の民俗学者で子どものいない巨泉に可愛がられた人であった。田中亀文洞、鷺見東一、西村庄、林家染丸、西田亀楽洞、高畑案山子、河本紫香、本田溪花坊、粕井豊誠、浪花贅六庵、山本芳夫、芳本倉多楼、大沢鯛六。そして「全国の同人の人達との連絡誌」として大正十年から昭和初年にかけて、「人魚」「人形筆」等の小雑

誌を発行していた。」と紹介している(57)。



『人魚』1号～3号(図15)



『人魚』4号～7号(図16)

ここで巨泉の個人誌『人魚』について少しだけ紹介すると、『人魚』の創刊は1921(大正10)年2月。きまぐれにはじめたものだから何時どうなるか分からないと煙幕を張りつつ始まった。この個人誌は巨泉の肉声を聞くことが出来る唯一のものであり大変貴重である。ここには巨泉の気持ちが包み隠さず率直に語られている。悩み、苛立ち、喜びなんでも綴っている。愛読者からの玩具に関する質問、巨泉の趣味家探訪記、玩具の民俗的説明、著書の解説、その他詩があり戯れ歌ありで巨泉の世界に引き込んでくれる。当館には1928(昭和3)年8月発行の7号まで所蔵している。注記に第1号から第7号までの出版年日と総ページ数を挙げておく(58)。

さて上記の人たちと巨泉が属した趣味の会が幾つかあり、最盛期には全国にどれほどの人が巨泉を支えたのだろうか。巨泉のおもちゃ絵は大正中期から昭和前期にかけて版行・頒布されたわけであるが、おりしもこの時代はおもちゃが流行した時期でもあった。巨泉のおもちゃ絵は一般には高額かもしれないが趣味家たちからすれば普通の買い物かもしれない。巨泉が『おもちゃ絵集』を版行し始めた1919(大正8)年にはまだ関心も薄かったが、大正末期から昭和前期はおもちゃの展示会がデパートで開催され人気で良く売れた時代でもあったから、おもちゃ絵にも次第に関心が集まり、会員への頒布と一般への販売とで巨泉夫婦が生活できた時代だったのであろう。

#### 1-11. 『おもちゃ画譜』について

巨泉の『おもちゃ画譜』は1932(昭和7)年に第1集が出て、1935(昭和10)年第10集で完結した。大和綴、石州和紙を使った半紙本である。石州和紙とは山口県産、楮100%で漉かれ丈夫で記録用、重要書類用紙に用いられる(59)。そこに描かれた玩具や縁起物は口絵以外は単色で、1点1点巨泉の解説付きである。これは『巨泉おもちゃ絵集』『巨泉漫筆おもちゃ箱』『おもちゃ千種』とは明らかに違っている。おもちゃとタイトルにあるが、お

もちゃ絵が主ではなく解説と共に読む本である。

巨泉は1920(大正9)年辺りから郷土玩具について文章を書き始めた。それから15年ほどの玩具に関する知見の蓄積がこの本に集大成されている。しかしそれは郷土玩具の民俗学的な研究や詳論ではない。玩具を実地に見、調べた玩具論であり貴重な玩具文献の1つといえよう。だから「少なくとも郷土研究家としてその地の玩具を調べ風俗を述べ他地方の同類のものと比較対称せんとする士は一読すべきだ。」(60)と書かれたり、「玩具蒐集研究家は無論趣味家、郷土研究家の座右置くべきの書なり。」とする宣伝文句が和泉の民俗学者小谷方明氏が主催した郷土和泉刊行会の会誌『郷土和泉』に掲載されたのである(61)。

だが巨泉のおもちゃ絵が「郷土研究家の座右置くべき」と言われるところまで来てしまったことに異和を感じざるを得ない。巨泉のおもちゃ絵とはそもそも趣味の絵であって、比較研究用などではなかった筈である。それが「歴史・特長・材料・製作方法にまでわたり克明な解説を加えたもの」(62)となり、おもちゃ絵という自律した作品ではなく、それに付随した文字情報によって評価されたのであれば、それは“おもちゃの解説書”であって巨泉の本道のおもちゃ絵とは別のジャンルに属す作品なのではないか。それが異和の根拠である。したがって川口栄三氏がこの本を「清水晴風の“うなゐの友”に比すべき木版玩具絵本」(63)という評価にも異和を感じざるを得ないのである。

『うなゐの友』のおもちゃ絵は彩色が施されているが、『おもちゃ画譜』のおもちゃ絵は木版・単色で、しかも詳細な解説付きである。『うなゐの友』には『おもちゃ画譜』のような詳しい解説がない。そう見ると、『おもちゃ画譜』は『うなゐの友』の系列には属さないと考えてよいのではないか。『おもちゃ画譜』以前に玩具の写真と解説が掲載された本はあるが、おもちゃ絵と共に詳しい解説を付した玩具絵本は巨泉の『おもちゃ画譜』が最初のものではないだろうか。その意味では画期的なおもちゃ絵本の誕生であったといえよう。

ただし評価に関していえば石沢誠司氏は『おもちゃ画譜』よりも、寧ろ『うなゐの友』に比すべき玩具絵本は『巨泉玩具帖』『玩具帖』との評価をされた。それは「『おもちゃ画譜』とはまったく異なった精細な挿絵がここには展開されている。」ことを重視されたからであるが、何を評価するのかによって判断が分かれるところである(64)。

## 1-12. 浪花おもちゃ学の鼻祖にしておもちゃ研究家巨泉

我々は「これがおもちゃ絵だ！」展の図録に巨泉の年譜を掲載することにした。巨泉の年譜についての底本は、1943(昭和18)年当館作成の『川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本

『展覧会目録』掲載の「巨泉略年譜」以外にはなく、この年譜に加筆することとした。そこで年譜にはなるべく沢山巨泉の著作を掲載したいと調査を始めた。すると大正から昭和前期に大阪の出版社が発行した郷土雑誌や大阪趣味の雑誌に巨泉の名前を続々と発見したのである。

これは我々の認識不足を露呈した格好になった。この時はまだ巨泉とは、おもちゃの絵を描いた人という程度の認識しかなく、しかも参考にした当館の目録はおもちゃ絵を描いた画伯巨泉を紹介するのが目的であったから、玩具研究家巨泉というもう一方の側面は全く省かれていた。従って年譜には主要なおもちゃ絵集や若干の趣味の会などは掲載されているが、雑誌等に発表した研究や随筆などは一切掲載されていなかった。

こうして認識を新たにした我々は『郷土雑誌・上方』『郷土趣味・大阪人』『趣味と名物』といった郷土大阪の雑誌から、更に『郷土研究』『旅と伝説』『鳩笛』『土の鈴』と郷土研究や玩具関係の雑誌へと巨泉の著述探しの範囲を広げて行った。

筆者などは恥ずかしい話であるが、民俗雑誌『旅と伝説』誌上で柳田国男や南方熊楠と並んで巨泉の名前を見た時、もしかしたら巨泉は民俗学の視点から玩具を研究した人で民俗学研究にも参加したのではないかと想像し、1913(大正 2)年に柳田国男が発行した雑誌『郷土研究』に目を通し、巨泉の名前を探したものであった。無論巨泉は民俗学に関係したわけではないから名前はなかったのであるが。

『旅と伝説』第 4 号、1928(昭和 3)年 4 月に玩具に関する記事が要求されていることを編集後記に萩原正徳が書いている。そして早くも 1928(昭和 3)年 6 月発行の 6 号には、郷土玩具の特集が組まれた。西沢笛畝「郷土玩具の種々相」、有坂与太郎「郷土玩具概説」が掲載された。巨泉も翌 1929(昭和 4)年にはここに登場することになる(65)。

斉藤良輔編『郷土玩具辞典』(東京堂出版 昭和 46 年)の「日本の郷土玩具—その歩みと系譜—」におもちゃの世界に関心を持った 2 つのグループとして学者派と趣味派があつて、学者派は坪井正五郎・柳田国男・折口信夫らで趣味派は清水晴風・淡島寒月らだとの記述がある。先の与太郎、笛畝、巨泉の 3 人は無論趣味派ではなく学者派であり、玩具研究家としても位置付けられるだろう(66)。

大正から昭和期にかけて、大阪の郷土趣味誌や郷土研究誌、あるいは大阪三越呉服店が大正から昭和期に出版した商業誌『大阪の三越』(67)に 3 年半に亘っておもちゃを紹介する文章を掲載するなど、巨泉の執筆は民俗や玩具の専門誌から一般誌までに亘り、大阪のおもちゃ博士としての地位を確立していった。大正中期から昭和戦中期におもちゃ

を研究した巨泉は浪花おもちゃ学の鼻祖とってよいであろう。

#### 1-13. おもちゃ絵集の値段

1923(大正12)年5月発行の三好米吉編発行・柳屋画廊のカタログ『柳屋』22号の「おもちゃ絵本」のコーナーに『おもちゃ千種』『巨泉おもちゃ絵集』などが掲載されている。以下に巨泉のおもちゃ絵の書名と販売価格を挙げる。

『おもちゃ千種』「片面絵目録付、三百枚」350円。

『巨泉おもちゃ絵集』「版画 百枚」35円。

『巨泉おもちゃ絵集』全5冊帙入 42円。

『巨泉おもちゃ十二支』1冊 5円20銭。

巨泉のおもちゃ絵集と比較するために掲載されている他のおもちゃ絵集の書名と販売価格を挙げておく。

『うなゐの友』全8冊 各3円10銭。(京都のちどりやでは大正14年に全10冊35円)

『雛百種』全3冊 8円40銭。(京都のちどりやでは大正14年に全3冊10円)

外国玩具『壽々』全5冊 7円62銭。(山内神斧の私家版)

淡島寒月筆『十二支画帳犬の巻』1冊 2円90銭。

これを見ると巨泉のおもちゃ絵の相場がかなり高額だったことが分かる。特に『おもちゃ千種』は300枚のセット価が350円である。これは相当の高額である。当時の公務員の給与を参考までに挙げると大阪商品陳列所の雇員は年俸552円、大阪府立図書館長が年俸3100円の時代である。おもちゃ千種には18名が購入したのだから、単純に6300円の売り上げであった。これは1923(大正12)年当時の大阪府知事井上孝哉・土岐嘉平・中川望らの年俸6000円を上回る額である(68)。

#### 1-14. おもちゃ絵を楽しむ

巨泉が勧めるおもちゃ絵の遊び方、楽しみ方の例を『人魚』3号の「巨泉漫筆おもちゃ箱」から拾ってみる。おもちゃ箱の版画は全て横絵で、一枚の大きさが縦七寸五分、横九寸五分。絵には干支の十二支、春夏秋冬の四季と12月の玩具があって、月々に関連する絵を選んで額面に入れる、正月は鶯に梅、日向の羽子板、2月は伏見や今戸の土狐といった風に入れ替える。夏祭りや酉の市にはそれに関連する絵を入れて楽しむ。またこれを書帖に仕立てて応接間などに置き来客に見てもらおうのもよい。玩具絵巻に仕立てるのもよい。



何枚かを選んで枕屏風に貼ったり、二曲、六曲屏風に貼り混ぜにすれば玩具屏風が出来上がる。当時の好事家・趣味人もおもちゃ絵をこんな風に仕立てて楽しんだのかもしれない(69)。こういった楽しみ方は和本仕立てや洋装本では味わうことができない。一枚物の版画は応用がきき色々な楽しみ方が出来た、巨泉はおもちゃ絵を購入した趣味人た

ちと交歓し、自分のおもちゃ絵を何時までも飽かずに楽しんでもらいたい、しかも筐底に秘蔵するのではなく生活空間に掲げて趣味的生活の糧となることを願っていたのである。

自費出版などは全国の玩具蒐集家・趣味人に向けて販売され、巨泉の頭には一般家庭に向けて販売しようという気持ちは当初はなかったようだ。それが少しずつではあるが、一般家庭にも普及したいと思うようになった。それは巨泉の玩具教育観があったからだ。物質主義を排し、玩具の力で自己本位でない人間、もっと無邪気、もっとウブな人間に作り替えたい、それで初めて平和な世界、平和な家庭が作れる、と考えていた(70)。おもちゃ絵もそれに役立つと考えてのことであろう。

#### 1-15. 巨泉のおもちゃ絵作法

「其れから人形や玩具を描くのに其人形や玩具の縁起や伝説も一と通り調べた上でなければ筆を執る事は出来ません、沢山のものの中には呪禁や凶事に用ひるものもあります。そんなものを祝ひ事の絵に描く事は出来ません。」「玩具其物が無邪気なものでありますから、是を写す際には自分の心も無邪気にして描いて行くのであります」(71)

「玩具の絵は蒐めて其れを研究しているものでなければ到底其真味を表現する事は不可能であります。土俗玩具のいろいろのものには各地方に依って異なった特徴があつて其れが色彩、紋様、形態等に顕れているのであります。是等のものが古き伝統を以て今日まで其幾分かが残されて来たのであつて其れが土俗玩具としての真の面白味のある貴き芸術品であります。」(72)

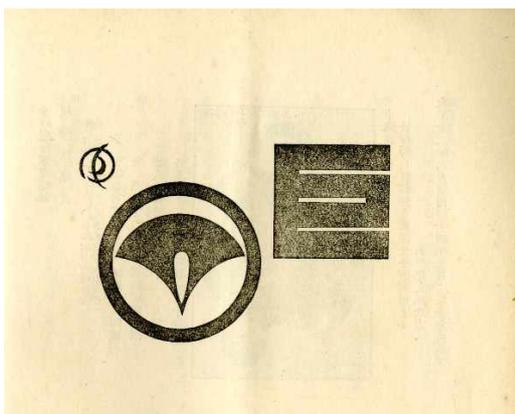
おもちゃを蒐集し、色彩、文様、形態を丹念に観察し邪念を棄て童心に戻っておもちゃ絵を描く。これが巨泉のおもちゃ絵作法であつた。おもちゃを愛した巨泉は玩具に厳しい目を向けた。巨泉の玩具の品定めは、新品だから悪いのではなく、古いものも一概に良いとは限らない、「古いものでありさえすれば、(中略)色彩が面白いとか、雅味があるとか、

世間なみに誉めて見る人もあるが、私はコンナのを好まない」といい、「拙作は何処までも拙作として、一文の価値すらないものである」と言い切っている(73)。

巨泉は犬張子とお伽犬を例に引き、「此二つのものは何れも写生より出でゝ図案化したものであって、到底一朝一夕に出来上がったものでは無いのである。」と書いている(74)。巨泉にとっておもちゃとは人、物、動植物を写生によって図案化する創作物なのであった。

巨泉がおもちゃに興味を持ち始めたのが1903(明治36)年28歳のころ、それから12年後40歳のとき、1916(大正5)年11月に“おもちゃ絵の会”を始めた。42歳の1918(大正7)年1月、おもちゃ絵の処女出版『巨泉おもちゃ絵集』の第1集が発行された。この辺りから本格的な巨泉のおもちゃ絵時代になって行くのである。

< 参考資料 ① >



巨泉の紋章とマーク・(『人魚』4号)

右の角型は、趣味に用いる紋章。中央は人魚洞のマーク。丸に鱗を描いたもので、「人魚の鱗の一片を図案にしたもの」。左は巨泉が平生用いているサインで、丸に巨の字。「納札又は略号として巨の字の変名」を用いた。

< 参考資料② >

巨泉の印譜 『川崎巨泉印譜』[発行者・発行年不明]より抜粋。

【1】 蝠亭作



【2】 椿所作



【3】 笛洲作



#### 【4】香迂作



碧水居主人

【1】北川蝠亭 名は藤太郎。大阪の人。陶印家として著名。朱泥とも号す。1916(大正5)年2月没す。76歳。(出典：伊達俊光「北川蝠亭君」『大大阪の文化』金尾文淵堂 1942(昭和17)年)

【2】岡本椿所 名は義邦、あざ名は叔礼。津山の人。東京に住す。中井敬所門。昭和8年(1933)没す。(出展：水田紀久篇「続補日本印人伝」『日本の篆刻』1966 中田勇次郎編 二玄社)

【3】河西笛洲 名は由また義弘。甲斐山梨の人。正しくは「かさい」と読む。その号も笛吹川にちなむ。大阪谷町のち天満に住す。晩に奈良東大寺勸進所に疎開。昭和22年(1947)7月7日没す。帰去来印譜・酔翁亭印譜あり。(出典：水田紀久篇「続補日本印人伝」『日本の篆刻』1966 中田勇次郎編 二玄社)

【4】橋本香迂 名は愷。字は三生。香迂又は栗佛と号す。加州金沢の人。大西金陽に就て絵画及び篆刻の術を学ぶ。京都で園田湖城と平安印会を起す。晩年浪華に来て東区広小路に住し印刻を業とする。大正昭和年間の人。(出典：『続大阪人物誌』 下巻 石田誠齋著 石田文庫発行 柳原書店発売 昭和11年)

#### 注記

原文の引用で、歴史的なか使いはそのままとし、漢字は新漢字とした。

略歴の典拠：有坂与太郎・清水晴風・西沢笛畝一『郷土玩具辞典』東京堂出版 1971年。竹内久遠一『国史大辞典』9 吉川弘文館 1988。久保田米所一『大日本書画名家大鑑・伝記上編』第一書房 1975。木村仙秀・久保佐四郎一『新訂増補人物レファレンス事典/明治・大正・昭和(戦前編)』日外アソシエーツ 2000年

図1 狗佛の蒐集品：「鯛車」藤野滋氏撮影 図2 狗佛の蒐集品：「虎乗り加藤」藤野滋氏撮影 図3 巨泉画：「大阪製鯛車」『巨泉玩具帖』1巻4号 図4 巨泉画：「大阪張子製加藤清正虎のり」『巨泉玩具帖』5巻2号 図5『これがおもちゃ絵だ!』展示図録 図6 巨泉肖像(『鯛車59』『故巨泉氏追悼號』) 図7「小摺りのおもちゃ絵」図8「切小絵」図9『江都二色』昭和6年版 稀書複製会 図10『うなみ

の友』 巻 図 11「小型達磨」と「小型夫婦達磨」図 12「佐四郎氏の描きしもの〔起上り 三種〕」図 13『巨泉漫筆おもちゃ箱』の 55 番 「小芥子這子」 図 14『巨泉漫筆おもちゃ箱』貼付の巨泉の名刺 図 15『人魚』1 号～3 号の表紙 図 16『人魚』4 号～7 号の表紙 図 17『巨泉漫筆おもちゃ箱』の 51 番「雉子車」

(1) T A O 「大阪府マルチメディア・モデル図書館展開事業」について

大阪府マルチメディア・モデル図書館展開事業は、通信・放送機構（T A O：総務省所管の特殊法人、平成 16 年 4 月から独立行政法人「情報通信研究機構（N I C T）」へ統合）による、通信放送分野の研究開発事業です。大阪府が平成 12 年 6 月、T A O の通信・放送研究成果展開事業「マルチメディア・パイロットタウン構想（マルチメディアモデル博物館（図書館）」）に協力申込をし、同年 9 月に採択されました。平成 12 年 10 月から平成 16 年 3 月まで T A O の直轄型事業として、通信・放送分野の基本的技術を組み合わせ、図書館サービスに有効な電気通信システムとして構築するための技術を開発し、実証実験を行なってデータを収集し、評価しました。大阪府は、中之島・中央の府立 2 館を核に、大阪府内の公共図書館、大学・専門図書館、学校等の協力のもとに、実験フィールドを提供し、事業運営に協力しました。なお、実証実験は平成 15 年度をもって終了し、平成 16 年度からは大阪府独自の成果継承事業としています。平成 18 年 5 月 25 日「人魚洞文庫データベース」をインターネットにて公開。大正から昭和にかけて全国各地の郷土玩具を描いたおもちゃ絵画家・川崎巨泉（1877-1942）が遺した自筆写生画帳をデジタル化し、一般公開した。（大阪府立図書館ホームページに掲載）

(2) 藤野滋『高橋コレクションについて』『我楽他宗第五番札所玩雪山狗佛寺一高橋敬吉とそのコレクションについて一』（未発表）

(3) 宮島久雄「大阪・「町の図案家」」 p 201<川崎巨泉>『大阪における近代商業デザインの調査研究』2000 年度サントリー文化財団研究報告書 2002. 10

(4) 呼び名の漢字と別号は肥田皓三氏のご教示による。

(5) 『川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本展覧会目録』昭和 18 年 大阪府立図書館編発行  
芳瀧入門の時期は巨泉の回想では 13 歳。当館作成の目録では 16 歳となっている。

(6) 「人魚の蒐集」『人魚』3 号 大正 13 年。「人魚洞広告」『人魚』6 号 1927(昭和 2)年。

(7) 島屋政一『日本版画変遷史』大阪出版社 1929(昭和 14)年

島屋政一著の『本木昌造伝』を出版した東京の朗文堂のホームページが島屋政一を詳しく紹介している。<http://www.ops.dti.ne.jp/~robundo/Bmotogi.html>

(8) 上野晴郎、前川久太郎『江戸明治「おもちゃ絵」』 アドファイブ東京文庫 1976(昭和 51)年

(9) 肥田皓三「立版古つれづれ」、『立版古—江戸・浪花・透視立体紙景色』(INAX ギャラー、INAXBOOKLET)、株式会社 INAX 1993 年

(10) 『江戸明治「おもちゃ絵」』上野晴郎、前川久太郎著 1976(昭和 51)年 アドファイブ東京文庫

(11) 権田保之助「玩具絵の話」『書画骨董雑誌』96 号 書画骨董雑誌社 1916(大正 5)年

(12) 有坂与太郎『おしゃぶり 古代篇』1926(大正 15)年 10 月 郷土玩具普及会発行

(13) 川崎巨泉「夏のおもちゃ」『にんぎょ』7 号 川崎巨泉 1928(昭和 3)年

(14) 「1411 二代長谷川貞信 [渡辺本] 生・嘉永元年十月 画系・初代貞信の長男 作画期・明治 大阪の人、長谷川氏、俗称徳太郎、画を父に学び初め小信といひしが、明治九年父の隠居後貞信(二代)と改む、役者似顔絵をよくし、大阪にて江戸風の芝居絵番附を興せり、明治四十三年春、長男(二代小信)に家督をゆずりて隠居す。」(由良哲次『総校浮世絵類考』)

「嘉永元年 10 月 18 日生まれ、昭和 15 年 6 月 21 日に長逝、享年 93。」「因に翁の葬儀は六月二十三日天王寺六万休町天鷲寺に於て盛大なる告別式があり、本会より供花一対を贈った(南木生)」(「長谷川貞信翁逝く」『上方』上方郷土研究会 昭和 15 年 7 月、115 号)

芳瀧の実弟笹木嘉造(画号芳光)は巨泉の『芳瀧画集』(川崎末吉編発行 1931 年)によれば、1909(明治 42)年 42 歳で没したという。暫定的ではあるが、笹木嘉造(画号芳光)の生没年は 1867(慶応 3)年～1909(明治 42)年としておく。

(15) 「のぞきからくり、猫芝居、犬芝居、化物づくし、いろはかるた、単語図、植木鉢づくし、舞づくし、五十三次、辻占、魚づくし、馬づくし、善悪見立、変り絵、朝日奈一代記、西郷戦争、小間物づくし、団扇づくし、紋づくし、狐の嫁入り、狸金玉くらべ、芝居、毒婦梅次一代記、掛物天神づくし、猿芝居、動物づくし、相撲取づくし、其他百般のものが描かれている。又甘酒屋、西瓜店、人力車、切子灯籠、神輿、布団太鼓、地車、鉢、御神灯、宝船の類は裏打ちをして其形ちに糊づけして作り上げるのである、又相撲取は裏表合わせて弄ぶのである。」

(16) 宮武外骨編『此花』第 15 枝 雅俗文庫 1910(明治 44)年 5 月 5 日発行

(17) 奥村寛純「おもちゃ絵と川崎巨泉画伯」『おもちゃ画譜』 村田書店 1979(昭和 54)年

(18) 山口昌男『NHK 人間大学「知の自由人たち—近代日本・市井のアカデミー発掘—」』日本放送協会 1997(平成 9)年

「大供会 明治 42 年(1909)久留島武彦・西沢仙湖・林若樹・広瀬辰五郎らの人形愛好家たちによって結成された。毎年一回各人が所持する人形類を持ち寄って展覧会を開催。その年内に入手した逸品を競い合った。同四四年(1911)一二月東京神田の青柳亭で、西沢仙湖・清水晴風・林若樹を幹事に、人形を土製・木彫・型抜き・雛の四部に分けて第一回人形一品会を開いた。その後、坪井正五郎、宮沢朱明・巖

谷小波・淡島寒月・片岡平翁・栗島狭衣・松居松翁・市川三升・池田天鈞居・内田魯庵・バーナード・リーチ・平沼亮三・山村耕花・豊泉益三・水谷幻花・中村鷹次郎ら各界趣味家を加え、明治から大正期の人形愛好運動に活躍した。」「大供とは「子供」に対する「大供」、子どもっぽい大人の意味であろう。子供専用と考えられてきた玩具類・無邪気な遊び道具もおとながなお愛着と興味を持つテレくささと、ひそかな回顧趣味とが同居した言葉で、当時の玩具に対する考え方がよく現れている。」(齊藤良輔『郷土玩具辞典』東京堂出版 昭和46年)

(19) 「雑報」“巨泉玩具画会” 『日本印刷界』日本印刷界社 1916(大正5)年3月号

(20) 吉田漱『浮世絵の基礎知識』 雄山閣出版 1974

(21) 『稀書複製会刊行 稀書解説 第七編上』米山堂 昭和7年 「江都二色」の解説。なお第3期の「江都二色」の解説は『稀書複製会刊行 稀書解説 第三編』大正13年発行にあり、これは樋口二葉が書いた。木村仙秀が書いたものは、木村捨三著『木村仙秀集』青裳堂書店 1984(昭和59)年 日本書誌学体系 31 の第4巻に『『江戸二色』の编者』として収載されている。

(22) 柳亭種彦『還魂紙料』 木村三四吾編校 出版者不明 1982

(23) 大沼宜規「寛政の改革と文人―「好事」「好古」観をめぐって―」 熊倉功編『遊芸文化と伝統』吉川弘文館 2003 所収

(24) 山本陽史「解題 宝合会と『狂文宝合会』」 小林ふみ子[ほか]編著『『狂文宝合記』の研究』汲古書院 2000年 所収

(25) 「略註『たから合の記』」松田高之、山本陽史、和田博通『江戸の文事』延廣眞治編 ペリかん社 2000年

(26) 木村仙秀『『江戸二色』の编者』『木村仙秀集』4 1984(昭和59)年

(27) 木村仙秀『『江戸二色』の编者』『木村仙秀集』4 1984(昭和59)年

(28) 有坂与太郎『江都二色』郷土玩具普及会 1930(昭和5)年

(29) 齊藤良輔編『郷土玩具辞典』東京堂出版 1971(昭和46)年 「うなみの友」の項目説明。

(30) 川崎巨泉「玩具の絵について」『鳩笛』郷土研究社 1925(大正14)年

(31) 久保田米所『玩具叢書』人形作者篇 雄山閣 1926(昭和11)年

(32) 久保田米所『玩具叢書』人形作者篇 雄山閣 1926(昭和11)年

(33) 奥村寛純「おもちゃ絵と川崎巨泉画伯」『おもちゃ画譜』 村田書店 1979(昭和54)年

(34) 内田魯庵「淡島寒月翁のこと」 淡島寒月著 齊藤昌三編纂『梵雲庵雜記』 書物展望社 1933

(35) 蘆田止水「故淡島寒月翁追悼会記」『和多久志』 第10号冬の巻 大正<sup>16</sup>年1月発行

(36) 肥田好三「宇崎純一の画業」 『幻の画家・宇崎純一～大正ロマンの残影～』小野市立好古館

1992(平成4)年

(36) 岐阜県立図書館ホームページに「岐阜県ゆかりの先駆者たち 第25回 生誕120年 猫の芸術家 河村目呂二 (かわむら めろじ) 1886-1959 (明治19年-昭和34年)」がある。

(38) 蘆田止水「故淡島寒月翁追悼会記」『和多久志』 第10号冬の巻 大正16年1月発行

(39) アン・ヘリング「わらべうたの詩人」『夢二美術館』第3巻 学研 1985

(40) 熊田司「三好米吉と「柳屋」のことなどー平野町時代を中心にー」『たまや』第3号 山猫軒 2006年

(41) 巖谷大四『波のあしおと登音ー巖谷小波伝ー』新潮社 1974

(42) 「南方をさす民玩」『鯛車』53 6巻5号 日本民俗玩具協会 1942(昭和17)年

(43) 川崎巨泉「民玩の南方進出」『鯛車』53 6巻5号 日本民俗玩具協会 1942(昭和17)年

(44) 「おもちゃ千種画報告」『人魚』創刊号 1922(大正10)年

(45) 武井武雄「私刊本・限定本」『本とその周辺』中央公論社 (中公文庫) 1975(昭和50)年 この他に、今村喬「武井武雄・私刊本」『これくしょん』吾八書房 1989(平成元)年にも一部転載されている。

(46) 川崎巨泉「郷土の光について」人魚6号 1927(昭和2)年

(47) 『聴蛙亭来訪署名簿』中尾堅一郎氏蔵。露石を訪問した人たちの中には清水晴風もいた。晴風は1909(明治42)年4月3日に訪問した署名が残る。なお水田紀久氏が『混沌 大阪藝文研究』30号 混沌会編 中尾泉松堂書店 2006(平成18)年 に「水落露石聴蛙亭来訪者名簿」を解題され、名簿の影印も同時に掲載されている。

(48) 「巨泉おもちゃ絵集」『にんぎょ』7号 1928(昭和3)年

(49) 「巨泉おもちゃ絵集」『にんぎょ』7号 1928(昭和3)年

(50) 川崎巨泉『巨泉漫筆おもちゃ箱』自序 大正13年 「大日本大阪鰻谷人魚洞にて 筆者川崎巨泉識」とある。

(51) 「人魚第四号のはじめに」『人魚』4号 1925(大正14)年

(52) 「玩具研究資料献本」『人魚』5号 1926(大正15)年

(53) 浜田徳太郎著『紙ー種類と歴史ー』ダヴィッド社 1958(昭和33)年

(54) 「巨泉おもちゃ絵集」『人魚』7号 1928(昭和3)年

(55) 「墨線版のことである。つまり木版画の基本をなす版のことである。版下絵の最も貴重な、又最初に描かれるものは線画であり、これが彫刻されて墨版と呼ばれ、摺刷されると校合摺と呼ばれ、これに彩色が施されるか、指定されるのである。従って、この線画が最も版画の基本となるものであるから、

- これを「主版」と呼ぶのである。」吉田暎二『浮世絵辞典』上 北光書房 1944(昭和19)年
- (56) 「おもちゃ千種画会報告」『人魚』1号 1921(大正10)年。「吾八」は1912(明治45)年当時、大阪市西区新町一丁目にあり、美術工芸品販売店だった。(『此花』21枝 明治45年5月25日発行の宣伝より)
- (57) 「浪花おもちゃ風土記」の序 奥村寛純『浪花おもちゃ風土記』 村田書店 1987(昭和62)年
- (58) 『人魚』1号 1921(大正10)年2月1日、16頁・第2号 1922(大正11)年9月25日、34頁・第3号 1924(大正13)年2月5日、34頁・第4号 1925(大正14)年3月1日、34頁・第5号 1926(大正15)年5月1日、34頁・第6号 1927(昭和2)年6月2日、34頁・『にんぎょ』第7号 1928(昭和3)年8月15日、34頁。第7号は誌名がにんぎょに変わった。
- (59) 加藤春治『和紙』産業図書出版 1958(昭和33)年
- (60) 「郷土和泉」郷土和泉刊行会 小谷方明編集 14号 1934(昭和9)年7月発行
- (61) 「郷土和泉」郷土和泉刊行会 小谷方明編集 15号 1934(昭和9)年9月発行
- (62) 『おもちゃ画譜』の村田書店の宣伝。『郷土玩具界の先覚 川崎巨泉翁を偲ぶ』掲載広告
- (63) 川口栄三「著作解題」『郷土玩具界の先覚 川崎巨泉翁を偲ぶ』川崎巨泉翁供養会編発行 村田書店製作 1979(昭和54)年
- (64) 石沢誠司「玩具絵本の系譜～『江都二色』から『巨泉玩具帖』まで～」『これがおもちゃ絵だ!』展図録 大阪府立中之島図書館 2006
- (65) 『旅と伝説』の元本の発行は東京・三元社。複製は岩崎美術社。巨泉の初掲載は「浪華土俗漫談」(『旅と伝説』第2年第4号)であった。
- (66) 「日本の郷土玩具－その歩みと系譜－」の「二つの流れ」の解説。斉藤良輔編『郷土玩具辞典』東京堂出版 1971(昭和46)年
- (67) 『大阪の三越』の編者は白石民憲、発行は三越呉服店大阪支店、東区高麗橋3丁目63。大正モダニズムの香りと純和風も加味した大正の百貨店文化雑誌である。
- (68) 『大阪府統計書』大正12年 大阪府 1925(大正14)年
- (69) 「巨泉漫筆おもちゃ箱 版画・頒布画会」『人魚』3号 1924(大正13)年
- (70) 「大供と玩具」『人魚』3号 1924(大正13)年
- (71) 「玩具の絵について」『人魚3号』1924(大正13)年
- (72) 「巨泉漫筆おもちゃ箱 版画・頒布画会」『人魚』3号 1924(大正13)年
- (73) 「新品だから悪い」『にんぎょ』7号 1928(昭和3)年

